

第七章 四季の行事と祭り

1. お正月

昔道路が舗装されていない時代には、年末の恒例行事として、各家の男衆総出で道を清掃し、大日山（天神山）・谷田山から掘り出した赤土を荷車で運び、一年間使用した道路の補修を兼ね各道路の中心に波状・帯状に撒き新年を迎える準備をした。また、各家々では玄関先の両側に赤土を盛り、その頂部に松・竹・梅の枝を束ねて挿し、素朴な門松を飾つて正月を迎えた。

「一年の計は元旦にあり」

お正月は、門松を立ててしめ縄を張り、神前には海の幸、山の幸をお供えして家族揃つて雑煮、おせち料理をいただき、新年の始まりを祝う行事であり、元旦を中心に行事がはじまる。

注連縄……七五三縄とも書く

門松で迎えた才神さまのいる神聖な区域を示す張り縄で、魔物を防いでその中に入れさせない境界、場所を区画し境界を示すための印などと言われている。しめ縄は縄をなうときは「左ない」で紙垂という紙をつける。

七五三縄とも書くように縄をなうとき、所々に藁の端を垂れ下がらせる数が、七・五・三としたところから名がついたといわれる。



しめなわ作り

かがみもち 鏡餅

神棚、床の間などにお供えする飾で、そこに橙、みかん、干柿、昆布など海・山の幸を添えることが多い。鏡餅は円盤で三種の神器の一つである八咫の鏡をかたどったもので、円形にするのは人間の心臓をかたどったとも言われる。それを食べることによって新しい生命を得るという信仰があった。

鏡餅に添えるものとして

橙…………木から落ちずに大きく育つので「代々大きくなつて落ちない」

串柿…………財が串でさしたように集まると云われる

昆布…………「よろこんぶ」の語呂あわせ

裏白…………潔白を意味する。また形が左右対称で夫婦の相性を祝う

海老…………腰が曲がるまで長寿を祈る

ゆずり葉…新しい葉が大きくなつて古い葉が落ちるので代々家系がつながっていく

「代々、譲りは、裏白で、昆布、めでたく、搗きませかためてもちがよい」と言わ
れていた。

おせち料理

「おせち」とは季節の変わりめの祝いの日という意味で、その内、最も重要なのが正月である。それで正月料理を「おせち料理」というようになった。

おせち料理は、正月中の主婦の仕事を軽くする意味もあって、保存性のあるものにする必要性から汁が出ず、形が崩れず、冷めても味が落ちないものが重宝がられたようである。重箱へ詰める順序として

一の重：数の子、田作り、黒豆、するめ等

二の重：紅白のかまぼこ、きんとん、だて巻き等

三の重：あまだい・鰯の西京漬け、平目の昆布締め、ふなや海老のするめ焼き等

四の重：やつがしら・れんこん・人参・椎茸・たけのこの煮物等 である。

2. お七夜



仏事として、1月9日から16日までの8日7夜の間、浄土真宗の御開山の師である親鸞^{しんらん}聖人を偲んで、聖人の命日を中心に行われる報恩講のことである。命日の食事は、精進料理でなければならないので、糸こんぶ・コンニャク・油揚げや大根を味噌汁にしたものをして3日間食べた。

お七夜には、付近の子供が寺に集まり、鐘撞堂^{かねつきどう}を「むしろ」で囲って暖をとり、夕方から夜中まで鐘を撞いた。（寺方町の光徳寺では現在も続いている。）

3. 節分

2月3日を節分という。どこの家でも「鬼は外、福は内」の掛け声とともに豆まきをする。歳の数だけ豆を食べ無病息災を願う。家の外への豆まきは、格好だけでほとんどまかなかつたのでは。

4. 祈年祭（みくわ祭）



神前神社の祈年祭

神社では、祭事に「鳳鳴社^{ほうめいしゃ}」愛好会の方々（楽人）により雅楽が奏楽される。

祈年祭は春3月田植の準備をひかえ、春祭りとして五穀豊穰^{ごこくほうじょう}を祈る祭りであり、神社で行われる祭りでも大祭に属する。また、みくわ祭、ぼたもち祭りとも言われるが正式には祈年祭であり、田の神様が里に下りてこられる時で、百姓の仕事の始まりを意味する祭りである。

祭りは、前日を「試楽」、当日を「本^{ほん}樂」、後日を「山おろし」と呼ぶ。神前

5. 雛祭り・端午の節句

3月3日は、雛祭りで桃の節句ともいい、女の子の幸せを祈る祭りである。この日が桃の節句と言われるのは、丁度桃の花が美しい時期と言うことだけでなく、桃の木は悪魔を退け、邪氣を祓う^{はら}と言われる事からきていると考えられる。

女の子の健やかに美しく育つことを祈念して、ひな人形を飾る家も多いが内裏さまを飾るとき左（向かって右）に飾るのが正しいとされていたが、現在は、逆になっているよう

である。

5月5日は、現在子供の日の祝日となっているが、端午の節句といって男の子の祭りの日で、この日には菖蒲や、粽が登場する、菖蒲は悪霊を除くとされる薬草で、粽は厄を除くお供えものとされている。

庭先には、鯉のぼりが威勢よく大空に泳ぐ姿が見受けられるが、強い元気な子に育つようとの願いが込められていることは広く知られている。

6. 花祭り（甘茶祭り）

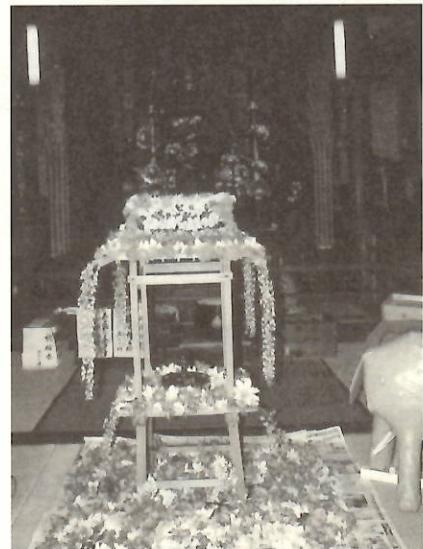
花祭りは密教の仏事で、お釈迦さまのお生まれになった4月8日に行う行事である。お釈迦さまは、生まれるとすぐ天と地を指さし「天上天下唯我獨尊」^{ゆいがどくそん}と唱えられた。その時、花々が一斉に開き、天は甘露の雨を降らせたという。

花祭りでは、四方50cm、高さ80cmの花御堂の屋根をれんげ・菜の花・つつじなどの春の花で飾り、お堂の中へお釈迦さまの立像を安置しており、参詣者は、このお釈迦さまの立像へ柄杓^{ひしゃく}で甘茶をかけ合掌礼拝する。また、この甘茶を頂くと邪氣払いや万病に効くと、善男善女が訪れ子供たちにも親しまれ一日中賑っている。

観音寺では、近年住職の都合で休止されているが、大日寺（開催日5月5日）、金剛寺では今でも行われている。



金剛寺の花祭り



大日寺の花祭り

7. みな月

氏子は屋台提灯、子供は行灯を奉納する。保曽井神社に昔から伝わる水無月神事は7月30

日に催される。氏子は各組毎に一基の屋台提灯を建てる。下の反り橋から上の宮までの参道に10基建てる。屋台提灯は、一基に大提灯が5個、絵はすべて手書きで前面は武士の絵、裏面は花絵が描かれている。夕暮れと共に火が入れられるとその素晴らしさに夏の暑さも忘れて立ち止り見入る参拝者が後を絶たない。しかし、現在は参道が車道となったのと、明治の頃の作品のため痛みもあって境内地だけしか建てられなくなつた。

子供の行灯は時代を反映してマンガ・アイドル画に変わり数々の力作が奉納されている。この行事は若干の違いはあるが、各地区においても受け継がれている。



保曽井神社のみな月



あんどん

8. 秋祭り

秋祭りは中入餅と寿司を頂くのが決まりであった。箱寿司・押し寿司が伝統的で、巻き寿司などは近年のものだという。

おぼろ昆布やそぼろ・花でんぶなどの具と、寿司飯を段々に積んで押し寿司を作った。若嫁などはそれを持って里帰りをした。

神前神社では、秋季大祭として雅楽も奏樂され神事が行われる。またその日には、神前神社と若宮八幡社で獅子舞が奉納される。

9. 山の神

山の神は仏堂形態でなく、組、瀬古単位で祀ってきた「組祭祀」による信仰の典型である。よって、山の神の祭神は明確でなくほとんどが山の神と刻印された自然石か丸石である。それも明治40年頃の神社合祀によってそれぞれの氏神さんへ移設された。行事としては、山の神単位で12月7日に餅搗きを行なう、餅をつくもち米は山の神田という共有の田



山の神

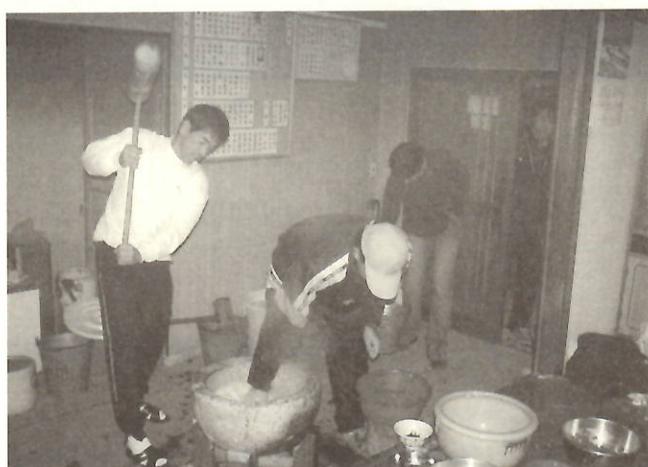
で取れたものを使う。共有の山の神田がないところは、家族数に応じてもち米を持ち寄る。

組員の家族全員がその年の宿に集まり、お鏡餅をつくり山の神の石碑にお供えをする。組員はその後、搗きたての餅を菜もち、あんころもち、おろしもち、ぜんざいなどにして賑やかにいただいた。

それぞれ地域の人と人との連携コミュニケーションが図れる機会となっていたが、山の神の行事も年々少なくなり、現在では全く無くなったのは残念なことである

寺方町二区の高角神田天白神社では、子供たちが神社に集まり壁上で「くど」を作り赤めし（あずきごはん）を炊き、その赤めしを山の神に供え一年の計を祝う。子供たちがいただく赤めしの器は、昔葉蘭はらんであったが現在

は茶碗を使用している。



菅原町のもち搗き



寺方町二区の山の神・赤めし炊き